

教 育 研 究 業 績

2022年5月1日

氏名 埴 和明

学位： 教育学修士

| | | |
|---|---------------------|---|
| 研 究 分 野 | 研 究 内 容 の キ ー ワ ー ド | |
| 社会福祉学 | 障害者福祉、特別支援教育 | |
| 主要担当授業科目 | 児童福祉、社会福祉、障害児保育 | |
| 教 育 上 の 能 力 に 関 す る 事 項 | | |
| 事項 | 年月日 | 概要 |
| 1 教育方法の実践例 | | |
| ①体験型学習の導入（車椅子、白杖、寝たきり障害者使用の意志伝達装置等の実際の活用を基にした授業の構成） | 平成6年4月 （現在に至る） | 平成6年度よりの日本私立学校振興・共済事業団「高等教育研究改革推進経費」採択による体験型授業法の研究の一環として、車椅子や白杖を使用した障害者理解のための体験授業を実施したり、また寝たきりの障害者で口頭による意志の伝達が困難な人々のために開発された機器を実際に活用した体験型授業を実践している。こうした器具や機器の活用は障害者に対する正しい理解と偏見、差別などを解消させる有効な方法として認識されておりプログラム学習が確立している。 |
| ②視聴覚教材の活用 | 平成5年4月 （現在に至る） | ビデオ教材を多く使用することによって講義による知識と技能の伝達だけでは伝えることが困難な具体的な事象を理解させることが可能となった。また、グループ学習の際にもビデオカメラを活用し、録画した内容の反復的再生により幅広い討論が可能となっている。 |
| ③インターネットを活用した福祉情報の収集方法の理解 | 平成11年4月 （現在に至る） | インターネットの普及とともに様々な領域の情報も広く Web 上で検索することが可能になってきた。しかしながらこうした情報を如何に取捨選択し自分にとって必要かつ十分なもののみを選び出すかという技術はたやすく身につくものではない。講義のなかで実際に福祉情報を Web 上に求め、それをいかに早くて確かな情報として取り入れて行くかを学ばせるという方法を実践している。特に福祉情報は様々な立場の人々がそれぞれの立場で HP を作成しているケースが多くこうした数多い情報のなかで自分が何を必要としているのか、また偏った見方で事柄を認識していないかを再確認する上で非常に有効な手段となっている。 |
| 2 作成した教科書、教材 | | |
| ①わかりやすい社会福祉学（改訂版） （再掲） | 平成10年4月 | 複雑な内容をもつ社会福祉を平易に解説し、学生や一般の人々に福祉を正しく理解し身近なものとして受け入れてもらえるよう企画した書籍である。改訂版では、社会福祉の大幅な見直しがあった流れを受け、法規なども大きく改正されたのを機に最新のデータと情報を多く盛り込み分かりやすく解説した。 |
| ②わかりやすい児童福祉学（改訂版） （再掲） | 平成12年4月 | 保育士や社会福祉士になるために必要な児童福祉の制度や法規を分かりやすく解説したものが本書の初版（平成8年12月出版）であった。改訂版では大幅な変更のあった児童福祉施設や法規などを最新のものに書き換え、児童の様々な問題も取り上げさらに児童に対する認識を深める一助となる書籍となった。 |
| ③「児童虐待」に関するビデオ教材の利用と作成 | 平成5年4月 | 平成5年頃からマスコミで児童虐待の話題が持ち出されるようになった。当時は児童の虐待という行為自体の存在さえも知られていなかったが、いち早くマスコミの取材したビデオや独自に取材したビデオを基に編集した教材を活用し、特に児童問題を扱う「養護原理」の講義に活用し、現実の問題としての認識を学生に周知させることに有効な教材となった。 |
| 3 教育上の能力に関する大学等の評価 | | |

| | | |
|---|---|--|
| 自己点検・自己評価における授業方法の点検と見直し | 平成 11 年 3 月 (現在に至る) | 自己点検・自己評価の一環として自らの行なった講義の評価を学生に求め、それを以降の授業方法の改善に活かしてきた。質問用紙を作成し各講座毎に用紙の配布、回収をした。記述方法は短答式と自由記述式にわかれ、短答項目に関しては集計し、傾向を分析した。自由記述に関しては内容を吟味し活用できる示唆があった場合、その授業に取り入れるよう考慮した。 こうした実践は授業方法の弛まぬ改善として評価されている。 |
| 4 実務の経験を有する者についての特記事項 ①ホームヘルパー3 級養成研修における講師 ②大学入試センター委員 | 平成 8 年 10 月 平成 7 年 4 月～平成 11 年 3 月 | 八千代市社会福祉協議会主催のホームヘルパー3 級養成講座の講師としてヘルパーの養成の一助となった。 東京都駒場の大学入試センターにおける特別問題作成委員として 4 年間、大学入試センター非常勤教員として勤めた。経歴欄にはその間、匿名教員として採用されていたので記載していない。その間に幾多の障害学生が受験し作成した問題が出題された。 |
| 5 その他 | | 該当事項なし |

職 務 上 の 実 績 に 関 す る 事 項

| 事項 | 年月日 | 概要 |
|--|--|--|
| 1 資格, 免許 高等学校教諭二級普通免許状 (社会) 盲学校教諭一級普通免許状 修士 (教育学) | 昭和 54 年 3 月 昭和 54 年 3 月 昭和 56 年 10 月 | 茨城県教育委員会 (昭 53 高二普第 1132 号) 茨城県教育委員会 (昭 53 盲一普第 2 号) 筑波大学博士課程心身障害学専攻 |
| 2 特許等 | | 該当事項なし |
| 3 実務の経験を有する者についての特記事項 ホームヘルパー3 級講座講師 大学入試センター委員 | 平成 8 年 10 月 平成 7 年 4 月～平成 11 年 3 月 | 八千代市社会福祉協議会主催ホームヘルパー養成講座講師 大学入試センター特別問題作成委員 |
| 4 その他 | | 該当事項なし |

研 究 業 績 等 に 関 す る 事 項

| 著書, 学術論文等の名称 | 単著・共著の別 | 発行又は発表の年月 | 発行所, 発表雑誌等又は発表学会等の名称 | 概要 |
|----------------------|---------|-------------|----------------------|--|
| (著書) 1. 現代施設養護の展開 | 共著 | 昭和 59 年 4 月 | 学術図書出版 (全 193 頁) | (全体概要) 現代の児童福祉施設における養護の実態とその課題について各種の施設ごとに論述したものである。具体的な事例なども検証し、様々な施設養護の問題点を明確にした。(担当部分概要) P 43～P 48, P 85～P 106 「第Ⅱ部、第2章(欧米における児童養護の展開)」 「第Ⅲ部、第3章(心身に障害のある児童のための施設)」 第2章では、欧米における児童養護の歴史の変遷を、古代、中世、近代とに区分し、主にイギリスを中心に論じた。第3章では、児童福祉施設のうち、心身に障害のある児童の |

| | | | | |
|------------------------------|----|-------------|--------------------|---|
| 2. 障害乳幼児の発達と指導 | 共著 | 昭和 61 年 4 月 | 福村出版 (全 202 頁) | <p>ための施設、虚弱児施設、精神薄弱児施設、盲児施設、ろうあ児施設、肢体不自由児施設、重症心身障害児施設に関して、その沿革、現状、そして養護の実際をまとめあげた。</p> <p>(共著者:星野卓郎(編者)、塙和明、坂野貢、滝口桂子、米山岳廣)</p> <p>(全体概要) 障害を有する乳幼児の発達上の問題とそれに対する処遇方法について各障害別に論じたものである。 (担当部分概要) P157～P170 「第9章(感覚の障害)」 障害のうち、感覚器官に、損傷、機能障害をもつ視覚障害、聴覚障害について、その障害の定義、そうした障害をもつ子供の問題、それぞれの障害児の発達特性、さらには保育、教育上考慮しておかなくてはならない事項を論じた。 共著者:石部元雄、平山論、浦崎源次(編著者3名)、塙和明、安藤隆雄、水野悌一、藤井和枝、池弘子</p> |
| 3. 精選幼児教育・社会福祉法規の解説(昭和62年度版) | 共著 | 昭和 62 年 4 月 | 建帛社 (全 414 頁) | <p>(全体概要) 幼児教育、社会福祉の関係法規について各法律、各条文毎に解説したものである。 (担当部分概要) P315～P332 「Ⅲおとなの福祉、第5章(精神薄弱者の福祉)」 精神薄弱者福祉法の全条文のうち、とくに重要であり、しばしば論議の対象とされる条文のうち、約20条について取り上げ、それぞれを解説した。また、精神薄弱者福祉法の成立過程についても論じている。 (共著者:佐藤順一、中山蔵、新谷俊夫、塙和明他21名)</p> |
| 4. 現代社会福祉論 | 共著 | 昭和 62 年 9 月 | 八千代出版 (全 279 頁) | <p>(全体概要) 現代の社会福祉について各領域別に詳述し、その問題点を明確にした。 (担当部分概要) P191～P230 「第10章(心身障害者福祉)」 社会福祉の領域のうち、心身障害者福祉について、理念、沿革、実態、また福祉制度の概要と機構を論じた。さらに、こうした内容を基に、現在、我が国が抱えている福祉課題について論述し、今後の行政側の対応、方向性を示唆した。 (共著者:宮脇源次(編者)、島崎征介、村形光一、塙和明、福川須美、高橋朋子)</p> |

| | | | | |
|--------------------------------|----|-------------|---------------------|--|
| 5. 養護原理 | 共著 | 昭和 63 年 4 月 | 学術図書出版 (全 277 頁) | <p>(全体概要) 現代の養護の在り方について各領域毎に論じたものである。最近、養護の問題が施設面や児童自身の問題、その他の点から指摘されるようになってきているがこうした問題について明らかにし、その解決についての方法を模索しようとした。 (担当部分概要) P 107～P 124 「第 7 章(施設養護の環境)」 社会福祉施設について、その環境体系と制度、物的環境、人的環境、その運用と経費といった観点から論じた。各施設の法律による最低基準の概要、職員の配置、施設設備費、施設措置 費など解説した後、様々な問題点を抱える施設の現状を明確にした。 (共著者:鈴木政次郎(編者)、佐藤昭二、井上和子、白石大介、小館静枝、埴和明、田中チカ子、大島恭二、畠山倫子)</p> |
| 6. 精選幼児教育・社会福祉法規の解説(昭和 63 年度版) | 共著 | 昭和 63 年 4 月 | 建帛社 (全 421 頁) | <p>(全体概要) 幼児教育、社会福祉の関係法規について各法律、各条文毎に解説したものである。 (担当部分概要) P 318～P 335 「Ⅲおとなの福祉、第 5 章(精神薄弱者の福祉)」 精神薄弱者福祉法の全条文のうち、とくに重要である条文、約 20 条について、それぞれを解説した。また、精神薄弱者福祉法の成立過程についても論じている。さらに、前年度、改正された国、地方公共団体の負担率の増減に伴う、各種の影響に関しても詳述した。 (共著者:佐藤順一、中山蔵、新谷俊夫、埴和明他 21 名)</p> |
| 7. 視覚障害心理学 | 共著 | 昭和 63 年 5 月 | 学芸図書 (全 205 頁) | <p>(全体概要) 視覚障害に関する心理学的考察を知覚、性格、行動、発達といった心理学に基づく研究領域毎に明確にした。 (担当部分概要) P 118～P 123 「第 VI 章(言葉と読みの発達, §1 言語)」 視覚障害児の言語発達に関して、健常児との発達の相違について、幾多の文献を紹介しながら検証した。その結果、生後数年間は視覚情報の欠如から若干の遅れが見られるが、その後は 語彙数、語の利用頻度などの点から見ても相違は見られないという結論に達した。さらに、こうした結果を基に、視覚障害児をもつ親の養育方法についても言及した。 (共著者:佐藤泰正(編者)、石田久之、加藤元繁、黒川哲宇、埴和明、徳田克己、佐々木正人)</p> |

| | | | | |
|-----------------------------|----|-------------|----------------------|--|
| 8. 障害児教育の基礎 | 共著 | 昭和 63 年 5 月 | 学苑社 (全 261 頁) | <p>(全体概要) 障害児教育の在り方について、基礎的な知識と技術を中心に解説を加えている。そのため、事例なども多く取り上げ、イメージが掴みやすくするなどの工夫をした。 (担当部分概要) P 92～P 98 「3 章の 4(障害の理解とその方法)」 視覚障害児の発達に関して、身体的、情緒的、知的、社会的発達に区分し、それぞれの特徴を論述した。その中でも、視覚障害児特有の表現といわれるブラインディズム、バーバリズム 等に関して、そのメカニズムに言及して、こうした行動の是非について過去の説を再検証した。 (共著者:小鴨秀夫、鈴木克明、柴崎正行(編著者 3 名)、安藤房治、埴和明、藤原義博、宮本文雄、松沢孝博)</p> |
| 9. 精選幼児教育・社会福祉法規の解説(平成元年度版) | 共著 | 平成元年 4 月 | 建帛社 (全 422 頁) | <p>(全体概要) 幼児教育、社会福祉の関係法規について各法律、各条文毎に解説したものである。 (担当部分概要) P 315～P 332 「Ⅲおとなの福祉、第 5 章(精神薄弱者の福祉)」 精神薄弱者福祉法の全条文のうち、とくに重要である条文、約 20 条について、それぞれを解説した。また、精神薄弱者福祉法の成立過程についても論じている。さらに、同法に伴う厚生省の通達、通知に関して必要と思われるものを紹介している。 (共著者:佐藤順一、中山蔵、新谷俊夫、埴和明他 21 名)</p> |
| 10. わかりやすい心身障害学 | 共著 | 平成元年 4 月 | 文化書房博文社 (全 212 頁) | <p>(全体概要) 『心身障害学』という耳慣れない学問を、従来の特殊教育の枠にとらわれない心理、教育、福祉の融合といった観点から概説したものである。『心身障害学』という、他には殆ど見られない名称を敢えて書籍のタイトルにした。 (担当部分概要) P 1～P 7, P 8～P 13, P 28～P 34, P 35～P 43, P 44～P 53, P 183～P 189, P 190～P 201 「はじめに」、「第 1 講(心身障害の定義)」、「第 2 講(精神薄弱児・者福祉の歴史)」、「第 5 講(障害児のための法律と制度)」、「第 6 講(社会福祉施設と特殊学校)」、「第 7 講(社会福祉施設の種類)」、「第 24 講(社会福祉施設実習に備えて)」、「第 25 講(障害者とボランティア活動)」 第 1 講では、心身障害の定義を WHO の例を参照しながら明確にした。第 2 講では、精神薄弱者の福祉の歴史を古代から現代に至るまで概観した。第 5 講では、心身障害児のために設けられている種々の法律について解説し、それぞれの関連性についても言及した。第 6 講は、社会福祉施設と特殊教育諸学校の違いについて、その法律的根拠、設置主体、運営方法等から論じた。第 7 講は、社会福祉施設の物的環境、人的環境について解説した。第 24 講では、福祉、特殊教育を学ぶ学生を対象に、実習の意義、方法、留意事項等について実習記録を参照しながら解説</p> |

| | | | | |
|------------------------------|----|--------|--------------------|--|
| 11. 精選幼児教育・社会福祉法規の解説(平成2年度版) | 共著 | 平成2年4月 | 建帛社 (全422頁) | <p>した。第25講では、ボランティア活動の必要性を中心に論述した。 (共著者: 埴和明、徳田克己、加藤哲文、小畑文也)</p> <p>(全体概要) 幼児教育、社会福祉の関係法規について各法律、各条文毎に解説したものである。 (担当部分概要) P315～P332 「おとなの福祉、第5章(精神薄弱者の福祉)」 精神薄弱者福祉法の全条文のうち、とくに重要である条文、約20条について、それぞれを解説した。また、精神薄弱者福祉法の成立過程についても論じている。 (共著者: 佐藤順一、中山蔵、新谷俊夫、埴和明他21名)</p> |
| 12. わかりやすい精神保健学 | 共著 | 平成2年4月 | 文化書房博文社 (全185頁) | <p>(全体概要) 精神衛生法から精神保健法改正に伴って変更された様々な処遇、施策など論述したものである。 (担当部分概要) P6～P10, P11～P14, P121～P124 「第1章(精神保健の活動, 精神保健に関する法律)」、「第6章(心身障害、視覚障害)」 改正された法律(精神衛生法から精神保健法へ)に伴い、精神保健とは何かを再確認する目的で企画された書籍であり、特に重要であると思われる、法律改正に伴う内容の変更について、入院制度の改善、精神医療審査会制度の創設、精神保健指定医制度の創設、社会復帰施設の法定化といった観点から論じた。また、現在の精神障害者の実態とその人々に対する施策に関しても言及した。 (共著者: 徳田克己、埴和明、青木省三(編著者3名)、佐竹真次、鈴木啓嗣、小林勝弘、福田東子)</p> |
| 13. わかりやすい社会福祉学 | 共著 | 平成2年9月 | 文化書房博文社 (全258頁) | <p>(全体概要) 社会福祉について平易に解説し、一般の人々にも福祉を理解してもらう意図で企画した書籍である。 (担当部分概要) P1～P9 「はしがき」、「第1章(1. 社会福祉の概念)」、「2. 社会福祉と社会保障」、「3. 社会福祉の今後の課題」 第1章で、社会福祉の概念を目的概念的なものと実態概念的なものの2つの大別し、その相違を概説した。また、現在、実施されている様々な社会福祉と社会保障の施策に関して、両者の関係をそれぞれの成立過程、法律的根拠等から論じた。さらに、今後の課題では、その視点を今後の高齢化社会にあて、健在化している様々な問題点とその解決について解説した。 (共著者: 埴和明、徳田克己(編著者2名)、河合康、福永善秀、都留民子、高玉和子、古川繁子、豊田宗裕)</p> |

| | | | | |
|---------------|----|--------|--------------------|--|
| 14. 障害児保育 | 共著 | 平成4年2月 | ひかりのくに社 (全287頁) | <p>(全体概要) 統合保育が定着しつつある現代において、実際には様々な困難な点や解決しなければならない問題点などがある。こうした事柄を論じた後に、実際に行われている保育についてその課題などを明確にした。</p> <p>(担当部分概要) P276～P281 「実践編(障害児施設における学生の実習記録から)」 障害児施設で実習を行った学生の記録を基に、実習期間中の学生の態度、心構え、また障害児に対する見方、考え方について考察した上で、施設における問題点と学生がそうした際の対処方法などを論じた。</p> <p>(共著者:井田範美、小山望、柴崎正行(編著者3名)、塙和明、京林由季子、加藤唯一、木全玲子、小松文博、寺沢ひろみ、寺地和子、中島豊)</p> |
| 15. 精選教育法規の解説 | 共著 | 平成4年4月 | 健帛社 (全226頁) | <p>(全体概要) 我が国における重要な教育法規について取り上げ、それを逐条解説したものである。</p> <p>(担当部分概要) P178～P191 「第7章 保健・健康・安全」 学校教育における保険、健康、安全に関する法律の代表的な法律である学校保健法ならびに日本体育・学校保健センター法について、逐条解説したものである。特に、学校保健法は主として健康診断、環境衛生検査、安全点検などの視点から法規が定められていることを明確にし、それぞれの条文がどのような意味と内容を持っているのかを説明した。さらに、日本体育・学校健康センター法については注解をつけ詳述した。</p> <p>(共著者:河田喬夫、兼子仁、佐藤順一(編著者3名)、塙和明、河田喬夫、兼子仁、佐藤順一、高橋寛人、小橋和夫、夏秋英房、中山茂)</p> |
| 16. 社会福祉総説 | 共著 | 平成5年3月 | 学芸図書 (全226頁) | <p>(全体概要) 社会福祉全般にわたって、各領域毎の現状と今後の課題などを詳述した。</p> <p>(担当部分概要) P157～P167 「Ⅲ社会福祉の方法第16章コミュニティ・ワーク」 コミュニティ・ワークの理論とその実際を省察した。</p> <p>近年、地域を単位とする福祉のあり方が見直されている。こうした時代にあつて、如何に円滑な福祉活動が実践されるべきかを援助技術の立場から論じた。</p> <p>(共著者:佐藤泰正(編著者)塙和明、五十嵐信敬、岡本多喜子、小林久利、清水英彦、瀬尾政雄、橋本厚生、山根律子、横山博子)</p> |

| | | | | |
|----------------------|----|---------|--------------------|--|
| 17. わかりやすい心身障害学(改訂版) | 共著 | 平成6年12月 | 文化書房博文社 (全228頁) | <p>(全体概要) 『心身障害学』という耳慣れない学問を、従来の特殊教育の枠にとらわれない心理、教育、福祉の融合といった観点から概説したものである。これは平成元年に出版された書籍の改訂版である。</p> <p>(担当部分概要) P1～P7, P8～P13, P28～P34, P35～P43, P44～P53, P183～P189, P190～P201</p> <p>「心身障害の定義」、「知的障害児・者の歴史」、「障害児のための法律と制度」、「社会福祉施設と特殊学校」、「社会福祉施設の種類」、「社会福祉施設実習に備えて」、「障害者とボランティア活動」</p> <p>第1講では、心身障害の定義をWHOの例を参照しながら明確にした。第2講では、精神薄弱者の福祉の歴史を古代から現代に至るまで概観した。第5講では、心身障害児のために設けられている種々の法律について解説し、それぞれの関連性についても言及した。第6講は、社会福祉施設と特殊教育諸学校の違いについて、その法律的根拠、設置主体、運営方法等から論じた。第7講は、社会福祉施設の物的環境、人的環境について解説した。第24講では、福祉、特殊教育を学ぶ学生を対象に、実習の意義、方法、留意事項等について実習記録を参照しながら解説した。第25講では、ボランティア活動の必要性を中心に論述した。</p> <p>(共著者: 塙和明、徳田克己、加藤哲文、小畑文也)</p> |
| 18. 児童福祉・社会福祉方法論 | 共著 | 平成7年6月 | 福村出版 (全213頁) | <p>(全体概要) 児童福祉と社会福祉に関して社会福祉援助技術を中心に論じたものであり、事例なども多く掲載し、社会福祉の現状などを明確にし、今後の福祉のあり方を示唆した。</p> <p>(担当部分概要) P83～P102</p> <p>「第5章: グループワーク」</p> <p>このなかで特に社会福祉の援助技術の1つであるグループワークについて詳述した。グループワークの歴史について、19世紀のイギリスのセツルメント運動から現代に至る過程を明らかにし、社会福祉の中でグループワークが現実如何に位置づけられているのかを論じた。</p> <p>(共著者: 井上肇、野口勝己、町井晶子(編著者3名)、塙和明、栗田喜勝、水田和江、畠中宗一、金子進之助、岡本多喜子、塚田健二)</p> |

| | | | | |
|-----------------|----|---------|----------------------|---|
| 19. 社会福祉要論 | 共著 | 平成8年3月 | 健帛社 (全 221 頁) | <p>(全体概要) 会福祉全般について、各領域別に現状と問題点を明らかにした書籍である。 (担当部分概要) P130～P143 「第8章母子福祉・女性福祉」 現代社会において女性の立場は向上したと一般にはいわれているが、実際には未だに女性に対する差別や経済的な賃金格差など改善する余地は多分にあるといわざるを得ない。こうした社会的背景を明確にし、そうした中で、母子福祉・女性福祉の現状と問題点、さらには働く女性と社会との関わりを、社会的な位置づけという視点で詳述した。 (共著者:井上肇、野口勝己(編著者2名)、塙和明、村井龍次、赤城正典、岡本多喜子、村上武志、土居忠行、畠中宗一、石井泰三、岩崎美知子)</p> |
| 20. わかりやすい児童福祉学 | 共著 | 平成8年12月 | 文化書房博文社 (全 234 頁) | <p>(全体概要) 児童福祉について理解しやすい形で解説した書籍である。近年の様々な子供の問題や彼らを取り巻く現代社会の実態などを多角的に検討した。 (担当部分概要) P1～P2, P1～P14, P191～P204 「はじめに」、「児童福祉の理念」、「児童の健康と母子保健」 児童福祉の理念をその成立過程の中から明らかにし、その理念が現状と食い違いを見せている時代において、本来の児童福祉のあり方を論じた。また、児童の健康と母子保健の章では、母子保健法と児童福祉とのつながりや母子保健の今後の問題点などを指摘した。 (共著者:塙和明、徳田克己、高玉和子(編著者3名)、中島豊、稲垣応顕、高見令英、京林由季子、桐原宏行)</p> |
| 21. 福祉心理学 | 共著 | 平成10年3月 | 学芸図書 (全 193 頁) | <p>(全体概要) 社会福祉に関して様々な書物が多いが、福祉を心理学的に捉えるという試みはなかった。この書籍では、社会福祉の各領域について心理学的なアプローチをし、援助者に対する心のケアについての重要性を明確に示唆した。 (担当部分概要) P15～P40 「第1章:援助技術の心理」 社会福祉における援助技術の位置づけを明確にした後、援助技術(ケースワーク、グループワーク、コミュニティワーク)の中で福祉心理学的なアプローチの必要性を理論的に証明した。特に、こうした技術の成立過程の中で、人間対人間としての関わりの中で形成されてきたこうした技術が、ともすると技術論的な受け止められ方をされがちな様相を呈していることを明確にし、人間形成にまでこうした機能を高めていく必要があることを示唆した。 (共著者:佐藤泰正、山根律子(編著者2名)、塙和明、石渡和実、岩坪寄子、佐藤眞一、佐藤至英、徳田克己、高見令英、塚越昌幸、</p> |

| | | | | |
|----------------------|----|-------------|----------------------|--|
| 22. わかりやすい社会福祉学（改訂版） | 共著 | 平成 10 年 4 月 | 文化書房博文社 （全 320 頁） | 平田幸広、望月珠美、吉村栄一） |
| 23. 社会福祉要論（第 2 版） | 共著 | 平成 11 年 3 月 | 建帛社 （全 220 頁） | <p>（全体概要） 本書は、平成 2 年に発刊された書籍の改訂版である。社会福祉の分野は近年、各領域で大幅な見直しが行われ、法規なども大きく改正されている。従って、現状に即した内容と最新の資料を挿入し、これからの福祉を改めて論じている。</p> <p>（担当部分概要） P1～P9 「はしがき」、「第 1 章(1. 社会福祉の概念、2. 社会福祉と社会保障)」、「3. 社会福祉の今後の課題」、「資料」</p> <p>第 1 章で、社会福祉の概念を目的概念的なものと実態概念的なものの 2 つの大別し、その相違を概説した。また、現在、実施されている様々な社会福祉と社会保障の施策に関して、両者の関係をそれぞれの成立過程、法的根拠等から論じた。さらに、今後の課題では、その視点を今後の高齢化社会にあて、健在化している様々な問題点とその解決について解説した。</p> <p>（共著者：塙和明、徳田克己（編著者 2 名）、河合康、福永善秀、都留民子、高玉和子、稲垣応顕、中山克夫、豊田宗裕）</p> |
| 24. 社会福祉総説（改訂版） | 共著 | 平成 11 年 3 月 | 学芸図書 （全 234 頁） | <p>（全体概要） 社会福祉全般に関して、各領域別に現状と問題点を明らかにした書籍である。本書は平成 8 年に著した書物の改訂で最新の法規などを盛り込んだ。</p> <p>（担当部分概要） P130～P143 「第 8 章母子福祉・女性福祉」</p> <p>現代社会においては女性の地位は向上したといわれているが実際には女性に対する差別や就業時の賃金格差など改善する余地は多分にある。こうした社会背景を明確にし、そうした中で母子福祉・女性福祉の現状と問題点、さらには働く女性と社会との関わりを詳述した。この第 2 版では最新のデータにより社会における女性の立場を明確にした。</p> <p>（共著者：井上肇、野口勝己（編著者 2 名）、塙和明、村井龍次、赤城正典、岡本多喜子、村上武志、土居忠行、畠中宗一、石井泰三、岩崎美知子）</p> <p>（全体概要） 社会福祉全般にわたって、各領域毎の現状と今後の課題などを詳述した。</p> <p>（担当部分概要） P161～P171 「Ⅲ社会福祉の方法 第 16 章コミュニティ・ワーク」</p> <p>コミュニティ・ワークの理論とその実際を省察した。近年、地域を単位とする福祉のあり方が見直されるようになってきている。こうした、時代にあって如何に円滑な福祉活動が実践されるべきかを援助技術の立場から論じた。この改訂版では法律改正などを踏まえ最新の概念などを示唆した。</p> <p>（共著者：佐藤泰正（編著者）、塙和明、上</p> |

| | | | | |
|-----------------------|----|-------------|----------------------|---|
| 25. わかりやすい心の健康学 | 共著 | 平成 11 年 4 月 | 文化書房博文社 (全 238 頁) | <p>野益雄、岡本多喜子、柿沢敏文、加藤哲文、加藤元繁、桐原宏行、金城悟、小林久利、佐島毅、徳田克己、橋本厚生、山根律子、横山博子)</p> <p>(全体概要) 現代のストレス社会にとって心の健康をどのように維持していくのかは大きな問題である。本書は現代社会の中で心のひずみが引き起こした事件や思春期にみられる問題行動なども例に取り上げ、こうした問題にどのように対処しまた心の安定を図るかなどについて解説した。 (担当部分概要) P 19～38 「第 1 章 3. 精神保健の活動」、 「第 1 章 4. 精神保健福祉に関する制度と法律」 第 1 章 3、精神保健の活動では精神保健の定義を解説し、精神保健福祉に関わる歴史的経緯と菌意義について展望した。さらに現在、精神保健福祉の対象となる人々に関して彼らの実態とその施策、また地域での受入体制などを詳述した。 第 1 章 4、精神保健福祉に関する制度と法律では本法律以前のいわゆる精神衛生と呼ばれていた時代から精神保健に至る過程とその中で成立した精神保健福祉法について解説を加えた。 (共著者：埴和明、徳田克己、宮本信也、福島洋子、澤立子、坂上佑子、沢宮容子、高見令英)</p> |
| 26. わかりやすい児童福祉学 (改訂版) | 共著 | 平成 12 年 4 月 | 文化書房博文社 (全 234 頁) | <p>(全体概要) 児童福祉について理解しやすいかたちで解説した書籍である。近年の様々な子どもの問題や彼らを取り巻く現代社会の実態などを多角的に検討した。本書は平成 8 年に著した著書の改訂版で平成 9 年に改正された児童福祉法に関して詳述し児童福祉施設などの名称が変更されたことなども解説した。 (担当部分概要) P III～P V, P 1～P 14, P 193～P 206 「はじめに」、「児童福祉の理念」、「児童の健康と母子保健」 児童福祉の理念をその成立過程から明確にし、それにも関わらず現状では齟齬が生じていることを論じた。また、平成 9 年度の児童福祉法改正のねらいを明確にし、今後の児童福祉のあり方について論述した。 児童の健康と母子保健の章では母子保健法と児童福祉との関連や母子保健の今後の課題についてを指摘した。 (共著者：埴和明、徳田克己、高玉和子 (編著者 3 名)、中島豊、稲垣応頭、高見令英、京林由季子、桐原宏行)</p> |

| | | | | |
|---------------------|----|-------------|----------------------------------|--|
| 27. 社会福祉研究の課題と方法 | 共著 | 平成 13 年 5 月 | 田研出版 (全 204 頁) | <p>(全体概要) 社会福祉の各領域に関してそれぞれの研究の仕方やテーマの設定の方法など、代表的な研究を例に出しながら解説した書である。</p> <p>(担当部分概要) P19～P25 「第 1 章児童福祉研究の課題と方法 (保育)」</p> <p>児童福祉の中でも特に保育に関する研究法について論じた。具体的には保育制度・保育行財政に関する研究、保育理論・保育思想に関する研究、保育者の資質・養成に関する研究、家庭教育に関する研究について最新の研究を保育学会、その他の保育関係委員会などの資料を基に詳述した。</p> <p>(共著者：佐藤泰正、徳田克己 (編著者)、塙和明、上野益雄、佐藤記道、池弘子、望月珠美、佐藤将朗、石渡和美、山根律子、三好義弘、横山博子、名川勝、川村匡由、山本哲也、小宮孝司、神谷直樹、桐原宏行、中村貴志、小林久利、水野智美)</p> |
| 28. 障害をもつ子どもの理解と援助 | 共著 | 平成 13 年 7 月 | コレール社 (全 224 頁) | <p>(全体概要) セグリゲーション (分離) からインテグレーション (統合) へという流れの中で障害児教育も大きく変わろうとしている現在、障害を持つ子供達をどのように理解し、彼らをどのように援助していかなくてはならないかを解説した書籍である。</p> <p>(担当部分概要) P77～P90, P207～P209 「第 5 章視覚に障害をもつ子ども」</p> <p>視覚に障害を持つ子供に関してその発達と特性、障害を早期に発見する方法、こうした子供達の発達援助をどのように実践していくのかを解説した。</p> <p>第 15 章障害をもつ人の生活とその支援 視覚障害児の進路と修学後の生活についてどのような問題点などがあるかを論じた。</p> <p>(共著者：福永博文、藤井和枝 (編著者)、塙和明、水野智美、中村真理、細川かおり、緒方明子、三村保子、岡田節子、福島佳子)</p> |
| 29. 障害社会学入門 (全て韓国語) | 共著 | 平成 14 年 2 月 | CHILD CENTER 出版社 (全 261 頁) | <p>(全体概要) 障害を社会的に考察したものである。障害に対する様々なテーマについてそれぞれの専門家が各々の立場から社会的に分析している。原文は全て韓国語にて書かれている。</p> <p>(担当部分概要) P45～P50 「盲導犬利用者はどのようなサービスを航空会社に求めているか」</p> <p>盲導犬利用者が航空機を利用する際に問題になるのが盲導犬の扱いである。現在、航空会社によってもその扱いはまちまちであるが、こうした処遇に利用者はどのような意見を持っているかを実際に調査をもとに考察したものである。</p> <p>(共著者：趙洪仲、徳田克己 (編著者)、高見令英、塙和明、水野智美、小宮孝司、小林朋子、望月珠美、那須野三津子、佐藤記</p> |

| | | | | |
|----------------------------------|----|-------------|----------------------|--|
| 30. 障害児保育 | 共著 | 平成 14 年 4 月 | 学芸図書 (全 174 頁) | <p>道、富樫美奈子、韓国人執筆者 9 名)</p> <p>(全体概要) 障害児保育について、その意義、統合保育と分離教育の違いとその成立過程について詳述した後、各障害別に障害児の特徴と保育現場での留意事項などを解説した。 (担当部分概要) P 7～P 10 「序章」 障害児保育の重要性について論じ、障害児の教育において如何に早期の教育・保育が必要であるかを解説した。また、統合保育、またその対極にある分離教育についてその成立過程について論じた。 (共著者：佐藤泰正、塙和明(編著者 2 名)、猪平真理、大木みわ、小畑文也、金城悟、小林朋子、小林宏明、佐藤克俊、佐藤高博、田中千賀子、徳田克己、中村崇江、那須野三津子、野沢純子、早坂菊子、平田幸宏、水野智美、宮本文雄、鷺尾純一)</p> |
| 31. 看護・医療・教育・保育・福祉に関わる人のための心身障害学 | 共著 | 平成 14 年 5 月 | 文化書房博文社 (全 313 頁) | <p>(全体概要) 心身障害学についてわかりやすく解説し、さまざまな分野で障害児・者と接する機会のある人々に障害についての知識と理解を深めるように企画された書籍である。 (担当部分概要) P 7～14、P 37～P 45、P 55～P 63 第 1 講「障害とは何か」、第 5 講「障害児・者のための法律と制度」、第 7 講「障害児施設の環境」 障害について 2002 年に WHO の改正した定義を基に解説し、それ以前の考え方とどのように変化しこれからどのように社会が障害者との交流を考えていくべきかについて考察した。第 5 講ではわが国における障害児・者のための法律を詳述し、それが障害者とのどのように関係しているかを論じた。第 7 講では障害児施設に関しての物的、人的環境を施設の設置の最低基準、あるいは経費の面から解説した。 (共著者：徳田克己、塙和明(編著者 2 名)、水野智美、那須野三津子、佐藤至英、加藤哲文、星野聡、西舘有紗、小宮孝司、小林朋子、名川勝、石上智美、富樫美奈子、白澤麻弓、遠藤寿海)</p> |
| 32. 福祉心理学 — 援助を必要とする人のために — | 共著 | 平成 14 年 6 月 | ブレーン出版 (全 231 頁) | <p>(全体概要) 福祉心理学とはなにかを、保育士、社会福祉士、介護福祉士、精神保健福祉士、社会福祉主事、児童指導員など福祉に携わる人に明解に解説した書籍である。 (担当部分概要) P 23～P 27 「対人援助を支える対象者の心の理解 a 視覚障害」 対人援助のうち、視覚障害者に対しての接し方や視覚障害者の特性、また発達における留意事項などを詳述した。 (共著者：岡田明、宮本文雄、中山哲史(編著者)、塙和明、長畑正道、小林厚子、山口春子、中村真理、白垣潤、今中博章、新保裕元、渡邊映子、佐藤至英、石田祥代、富田初代、中元未央、浅井達也、斉藤保雄)</p> |

| | | | | |
|-------------------------------|----|-------------|----------------------|--|
| 33. 幼児教育リーディングズ | 共著 | 平成 15 年 4 月 | 北大路出版 (全 191 頁) | <p>(全体概要) 幼児教育に関わる教員がそれぞれの研究領域に基づいて様々な視点から幼児教育について論じた書籍である。 (担当部分概要) P83~P94 第 2 部第 4 章「障害児保育への理解のために」 平成 14 年度より保育士養成カリキュラムの改正により「障害児保育」が必修科目となった。こうした変化は障害児保育の必要性が十分に認識されてきたことが背景にある。しかし現実には障害児の受け入れには幼稚園、保育所ともに苦慮しているのも事実である。これは障害児に対する正しい理解と認識がまだされていないことも一因として挙げられる。こうした点を踏まえ本章では障害児保育に関する正しい知識を伝えるよう配慮しながら詳説した。 (共著者：深谷昌志、中田カヨ子(編著者 2 名)、今井和子、大國ゆきの、永井聖二、宮下恭子、金城悟、塙和明、深谷和子、小林厚子、長畑正道、周建中、小原由美子、加藤理)</p> |
| 34. ヒューマンサービスに関わる人のための社会福祉の学び | 共著 | 平成 15 年 4 月 | 文化書房博文社 (全 337 頁) | <p>(全体概要) 本書は社会福祉士、介護福祉士、保育士、看護師、福祉科教員免許状を取得しようとする学生がグローバル化するとともに多様化する社会の流れを受けて変化しつつある社会福祉を今まで以上に様々な視点から学ぶことができるよう配慮され構成された書籍である。 (担当部分概要) P7-P15, P16-P24, P206-P217 「第 1 講社会福祉の理念」「第 2 講社会福祉と社会保障」「第 18 講コミュニティー・ワーク」 第 1 講では現在、実施されている社会福祉を概説し、実体概念的な福祉と目的概念的な福祉の相違を明確にした。第 2 講では社会福祉と社会保障の相違を明らかにし、各国別の考え方の相違を浮き彫りにした。また、今後の社会福祉と社会保障の進むべき方向性についても論じた。第 18 講では、社会福祉援助技術のうち、間接援助であるコミュニティー・ワークについてその成立過程や現在、実施されている事柄などを詳述した。 (共著者：塙和明、那須野三津子(編著者 2 名)、挽地康彦、嶋田英史、村瀬ひろみ、高玉和子、水野智美、野澤純子、遠藤敦子、山中克夫、和田一郎、小林朋子、石上智美、青柳まゆみ、富樫美奈子、望月珠美、西館有紗、TAI LEE MING、吉岡岩朗)</p> |

| | | | | |
|---------------------------------|----|--------------|-----------------------|---|
| 35. ヒューマンサービスに関わる人のための児童福祉論 | 共著 | 平成 15 年 4 月 | 文化書房博文社 (全 274 頁) | <p>(全体概要) 本書は、児童福祉をはじめ学ぶ際に、児童福祉の基本的な考え方や児童を取り巻く環境とそこから派生する様々な問題やその援助方法などを理解させることを目的として刊行されたものである。最近の児童問題なども多く盛り込んで構成されている。</p> <p>(担当部分概要) P221-P231 「第 8 章児童の健康と母子保健」 児童の健康に関する様々な法律を概説した後、その中心となる母子保健法を詳述し、児童福祉法との関連や母子保健の現状と問題点、その将来について展望した。</p> <p>(共著者：水野智美、徳田克己(編著者 2 名)、中島豊、高玉和子、高橋稔、石田祥代、石上智美、西館有紗、小川圭子、豊福義彦、望月珠美、小林朋子、石川洋子、埴和明、那須野三津子、川島和子、富樫美奈子)</p> |
| 36. 社会福祉総説三訂版 | 共著 | 平成 16 年 4 月 | 学芸図書出版 (全 254 頁) | <p>(全体概要) 社会福祉全般にわたって、各領域毎の現状と今後の課題などを詳述した。</p> <p>(担当部分概要) P 175～P 185 「Ⅲ社会福祉の方法 第 1 6 章コミュニティ・ワーク」 コミュニティ・ワークの理論とその実際を省察した。近年、地域を単位とする福祉のあり方が見直されるようになってきている。こうした、時代にあって如何に円滑な福祉活動が実践されるべきかを援助技術の立場から論じた。この三訂版では法律改正などを踏まえ様々な概念などを示唆した。</p> <p>(共著者：佐藤泰正(編著者)、埴和明、上野益雄、岡本多喜子、柿沢敏文、加藤哲文、加藤元繁、桐原宏行、金城悟、小林久利、佐島毅、徳田克己、橋本厚生、山根律子、横山博子)</p> |
| 37. 社会福祉援助技術論 | 共著 | 平成 17 年 7 月 | 文化書房博文社 (全 211 頁) | <p>(全体概要) 本書は社会福祉士、介護福祉士、保育士、看護師、福祉科教員免許を取得しようとする学生が社会福祉の専門技術を学ぶ際に必要な概念や技術を明解に論じた書籍である。</p> <p>(担当部分概要) P3, P7-20 「はじめに」「第 1 章 社会福祉援助活動とは」 はじめにでは、本書の目的である社会福祉援助技術の理解を如何に進めるかを解説した。第 1 章では社会福祉援助活動を論じた上で、社会福祉援助活動の枠組みとそれに関わるサービスの提供機関と施設について詳述した。</p> <p>(共著者：埴和明、西館有紗(編著者 2 名)、那須野三津子、稲垣美加子、石川和穂、今井朋美、石野敏夫、山口春子、金城悟、石上智美、富樫美奈子、小野聡子、野澤純子)</p> |
| (学術論文) 1. 盲児の点字触読速度に関する発達的研究 | 共著 | 昭和 55 年 12 月 | 視覚障害教育・心理研究 第 2 巻、1 号 | <p>盲児の点字触読速度の発達について、小学部 1 年生から中学 部 3 年生までの平均速度を基に、その発達の程度がどの学年にお</p> |

| | | | | |
|--|----|----------|--|--|
| | | | P11～P17 | いて大きく見られるかを、統計的手法を用いて考察した。 (共同研究につき、本人担当部分抽出不可能) (共著者:佐藤泰正、埴和明) |
| 2. 弱視児MTの発達・相談記録(1)、平仮名読字指導を通して | 共著 | 昭和56年7月 | 視覚障害教育・心理研究 第2巻、2号 P5～P10 | T大学視覚障害研究室カウンセリング相談のため、定期的に訪問していた弱視児の平仮名指導を通して、弱視児がどのような文字の識字に困難を生ずるのかを明らかにした。 (共同研究につき、本人担当部分抽出不可能) (共著者:安藤房治、埴和明) |
| 3. 盲児の点字触読に関する発達の研究(1) | 共著 | 昭和57年3月 | 特殊教育学研究第19巻、第4号 P1～P7 | 盲児の点字触読速度の変化を、過去の研究と比較して時代的変化がどの程度、現れているのかを明らかにした。また、その結果と点字指導の方法とがどのような関係があるのかを検討した。 (共同研究につき、本人担当部分抽出不可能) (共著者:佐藤泰正、埴和明) |
| 4. 触知覚における8点パターンの可読性の検討 | 単著 | 昭和58年12月 | コンピューター利用による感覚代行・補償の方法に関する研究論文集(国際科学振興財団、日本アイ・ビー・エム社刊行) P113～P136 | 漢点字の開発に際して、8点点字の触知性の基礎的研究を行った。本研究では、通常の点字触読(6点点字)の触知性が点の増加に従い、どのように変化していくのかを、統計的に解析した。 |
| 5. 触知覚における8点パターンの可読性の検討(1)、触読時の読速度の変化について | 単著 | 昭和59年3月 | 東京成徳短期大学紀要、第17号 P123～P130 | 8点点字の触知性に関して、点字触読速度の変化を変数として考察した。触読速度はデジタイザー上の点字を通過する手指の接触時間を基に、コンピューターで解析した。 |
| 6. 触知覚における8点パターンの可読性の検討(2)、8点パターンの弁別力の相違について | 単著 | 昭和60年3月 | 東京成徳短期大学紀要、第18号 P113～P120 | 8点点字の触知性に関して、8つの点で構成するパターンによる相違を考察した。パターンは256種類の図形になるが、それを幾つかのカテゴリーに区分し、それぞれの触読に際しての誤読数を変数に用いた。 |
| 7. 障害児保育・実践と理論、心身障害児施設における学生の記録から | 単著 | 昭和62年12月 | 月刊保育とカリキュラム 昭和63年1月号 P126～P129 | 学生が心身障害児施設で行なった実習の際の、記録ノートを基に、実習時における必要とされる事柄を解説したものである。施設は3種(精神薄弱児施設、肢体不自由児施設、重症心身障害児施設)を選び、それぞれの留意点を指摘した。 |
| 8. 「社会福祉士及び介護福祉士法」制定とその影響について | 単著 | 昭和63年3月 | 東京成徳短期大学紀要、第21号 P109～P116 | 「社会福祉士及び介護福祉士法」制定に至るまでの経過と、その法律の内容、また今後の問題点等を考察したものである。本論文では、特に制定までの様々な分野での賛否両論の背景を明確にした。 |

| | | | | |
|--|----|---------|------------------------------|--|
| 9.「社会福祉士及び介護福祉士法」制定に関する一考察 | 単著 | 昭和63年3月 | 桐花教育研究所研究紀要、第1号 P9～P16 | 「社会福祉士及び介護福祉士法」制定までの過程を概観した後、法律の骨格となる条項、またそれが種々の領域に及ぼす影響について論じた。さらに、受験資格認定の経緯についても言及した。 |
| 10.「社会福祉士及び介護福祉士法」制定と以後の動向 | 単著 | 昭和63年7月 | 東京成徳社会福祉研究、第1号 P1～P12 | 「社会福祉士及び介護福祉士法」制定以後の様々な分野での動向をまとめたものである。特に、カリキュラム設定や学生の受け入れなどの養成施設の対応に焦点を当てた。 |
| 11. 視覚障害児の言語発達に関する文献的研究 | 単著 | 昭和63年7月 | 東京成徳社会福祉研究、第1号 P57～P65 | 視覚障害児の言語発達に関する欧米、さらに本邦の論文を概観しながら、視覚障害児の言語発達の特徴を明らかにした。この一部が、前記の著書「視覚障害心理学」に採られている。 |
| 12. 視覚障害者に対するイメージに与えるラベルの影響 | 共著 | 昭和63年7月 | 東京成徳社会福祉研究、第1号 P66～P71 | 視覚障害者に対するイメージが、ラベリング効果でどのように変化するかを調査、検討した。本研究では、視覚障害者を示す言葉として4種のラベル(盲人、視覚障害者、めくら、目の見えない人)を用いた。 (共同研究につき、本人担当部分抽出不可能) (共著者:徳田克己、埴和明) |
| 13. 小規模障害者作業所に 関する一考察、-その 実態と問題点について - | 単著 | 平成2年3月 | 東京成徳短期大学紀要、第23号 P159～P166 | 養護学校卒業後の進路のひとつとして、また精神障害者の社会復帰に備える場として設けられている小規模障害者作業所に関して、その設置形態、運営方法、財政的負担等の点から考察を試みた。その結果、作業所間の格差が大きく、また、都道府県により援助がかなり異なることが示唆された。 |
| 14. 平成2年の精神薄弱者福祉法改正の内容とその意義について | 単著 | 平成4年3月 | 東京成徳短期大学紀要第25号 P183～P193 | 平成2年6月に改正された精神薄弱者福祉法について、その意義と内容、また変更点などを点検、検討した。法改正の骨子は、第2種社会福祉事業として精神薄弱者居宅介護事業、精神薄弱者短期入所事業、精神薄弱者地域生活援護事業が、第1種社会福祉事業として精神薄弱者福祉ホームと精神薄弱者通所療養所が新たに追加されたことなどが挙げられるが、こうした制度、施設の内容についても詳述した。 |
| 15. 児童虐待再考 —児童福祉研究の視座から— | 単著 | 平成12年4月 | 月刊「民病研」123号 | 最近、児童虐待の事件が多発していることを踏まえ、児童の虐待とはどのような行為を指すのか、また近年の児童虐待の実態がいかなる様相を呈しているのかを最新のデータを基に解説し、児童福祉の視点からこうした状態を改善していくための方策などを示した。この雑誌は民間病院問題研究所から刊行され病院、医学関係者向けのものであるため内容もそれに合わせたものにした。 |

| | | | | |
|--|----|--------------|--------------------------------------|--|
| 16. 子どものサンタクロースの認識に関する調査研究 | 共著 | 平成 12 年 8 月 | 実践人間学 第 3 号 P15～P20 | <p>子ども達にとってクリスマスとサンタクロースは特別な意味を持っている。子ども達はサンタクロースが自宅にきてプレゼントを置いていってくれると信じている。こうした心理がどのような情報によってもたらされるのか、またこうしたことを子どもはいつ頃まで信じているのかを幼稚園、幼児教室に在籍する子どもの保護者にアンケートを依頼し、その結果を基に分析した。</p> <p>(共同研究により、本人担当部分抽出不可能)</p> <p>(共著者：塙和明、水野智美)</p> |
| 17. どのような介護等体験の事前・事後指導が大学に対して求められているか — 特殊教育書学校および福祉施設を対象とした質問紙調査の結果から — | 共著 | 平成 12 年 8 月 | 実践人間学 第 3 号 P21～P30 | <p>平成 10 年より小学校および中学校の普通免許状を取得しようとする学生に対し、介護等体験の実施が義務づけられるようになった。しかしながら学生の受入をする特殊教育諸学校関係者や福祉施設関係者に戸惑いの声は大きい。こうした探検実習に先立って大学側が事前に学生に指導しておかなくてはならない事項、また実習終了後の指導内容に関して特殊教育関係者、社会福祉施設関係者に調査を行い必要事項を明確にした。</p> <p>(共同研究により、本人担当部分抽出不可能)</p> <p>(共著者：海老沢千冬、塙和明、徳田克己)</p> |
| 18. 大学生の受けてきた障害理解教育の内容 | 共著 | 平成 12 年 10 月 | 障害理解研究 第 4 号 P1～P10 | <p>大学在籍生にかつて小学生、中学生、また高校生時代に自分が障害、あるいは障害児・者に関してどのような知識を得てきたか、またその知識の情報源はいかなるものであったかを調査し、大学生にとってどのような障害理解教育をしていかななくてはならないかを検討した。</p> <p>(共同研究により、本人担当部分抽出不可能)</p> <p>(共著者：海老沢千冬、堀尾雅美、徳田克己、塙和明)</p> |
| 19. 教員養成機関に求められる介護等体験の事前・事後指導に関する一考察 | 共著 | 平成 13 年 3 月 | 東京成徳短期 大学紀要 第 3 4 号 P91～P97 | <p>平成 10 年より小学校および中学校の普通免許状を取得しようとする学生に対し、介護等体験の実施が義務づけられるようになった。しかしながら学生の受入をする特殊教育諸学校関係者や福祉施設関係者に戸惑いの声は大きい。こうした探検実習に先立って大学側が事前に学生に指導しておかなくてはならない事項、また実習終了後の指導内容に関して特殊教育関係者、社会福祉施設関係者に調査を行い必要事項を明確にした。本論文では調査項目全てを精査し実習に関する問題点やその改善方法なども指摘した。</p> <p>(共同研究により、本人担当部分抽出不可能)</p> <p>(共著者：塙和明、海老沢千冬、徳田克己)</p> |

| | | | | |
|--|----|-------------|---------------------------------|---|
| 20. 大学に対して求められる介護等体験の効果的な事前・事後指導—事前・事後指導実施の実態と関係者のニーズに関する調査報告— | 共著 | 平成 13 年 4 月 | 障害理解研究会出版部 (全 50 頁) | 16, 18 で示した論文を踏まえ、介護等体験の事前・事後指導のガイドラインの存在や体験先や大学関係者間の共通認識の必要性・重要性を再確認し、どのような指導が本来なされなければならないのかを報告書としてまとめた冊子である。これは調査に協力して戴いた特殊教育書学校、社会福祉施設、また大学関係者に配布した。 (共同研究により、本人担当部分抽出不可能) (共著者：徳田克己、海老沢千冬、塙和明) |
| 21. 在外教育施設における特殊教育の現状と可能性 | 共著 | 平成 14 年 2 月 | アジア障害社会学研究第 1 号 P13～P16 | 在外の教育機関・施設における障害児に対する支援について各国の日本人学校での調査をもとにその現状と問題点、また将来に向けた取り組みについて考察した。 (共同研究により、本人担当部分抽出不可能) (共著者：那須野三津子、塙和明、高見令英) |
| 22. 韓国における盲導犬の育成および使用の現状 | 共著 | 平成 14 年 2 月 | アジア障害社会学研究第 1 号 P25～P29 | 韓国における盲導犬の使用の実態を他の日本人研究者 1 名と韓国人研究者 1 名の 3 名で調査した結果をまとめたものである。 (共同研究により、本人担当部分抽出不可能) (共著者：石上智美、趙洪仲、塙和明) |
| 23. 日本における特殊教育の動向と課題 | 共著 | 平成 14 年 9 月 | アジア障害社会学研究第 2 号 P9～P14 | わが国における特殊教育の現状をまとめたものである。特に障害児童数の現象がそれぞれの教育機関に及ぼす影響を与えているのかを詳述した。 (共同研究により、本人担当部分抽出不可能) (共著者：那須野三津子、塙和明) |
| 24. 韓国の大学生の盲導犬に関する認識 | 共著 | 平成 14 年 9 月 | アジア障害社会学研究第 2 号 P53～P58 | 韓国の大学生に盲導犬の使用についてのアンケート調査を実施し、韓国の大学生が視覚障害、またそうした人々の盲導犬使用についての理解がどの程度進んでいるのかを考察した。 (共同研究により、本人担当部分抽出不可能) (共著者：石上智美、塙和明、趙洪仲) |
| 25. 盲導犬に関する調査研究—盲導犬に関して一般市民はどのような疑問や意見をもっているか— | 共著 | 平成 15 年 3 月 | 東京成徳短期大学紀要 第 36 号 P47～P51 | 盲導犬に対して一般の人々がどのような認識を抱いているのかを実際に調査研究した。調査対象は小学生、中学生、高校生、成人合計 2,433 名の回答を基に集計した。 この結果、盲導犬に関してはその使用者である視覚障害者に対する親和度が高く、特に小学生、中学生段階では犬に対する興味、関心の高さと相まって親和度の高さが顕著であった。また、各年齢ともに盲導犬や視覚障害者に対する理解に大きな差があることが判った。この調査をもとに今後の福祉教育や福祉教材の作成をしていく計画があり、その先駆的な役割を果たす結果となった。 |

| | | | | |
|--|-------------|---------------------------------|---|---|
| 26. 小学生の交通バリアフリーに関する認識 | 共著 | 平成 17 年 12 月 | The Journal of Community Education and Counseling 第 4 巻 第 1 号 | 本論文は韓国の Korean Association for Community Education and Counseling が発行している学術雑誌に投稿したものである。我が国の小学生が交通バリアフリーについてどのような知識や認識を抱いているのかを調査したものであり韓国における同様な調査を行なう先駆的な論文である。 (共同研究により、本人担当部分抽出不可能) (共著者：塙和明、西舘有沙、水野智美、徳田克己) |
| <p>(その他) [学会口頭発表]</p> <p>1. 盲児の点字触読速度の発達について</p> <p>2. 読書速度に関する基礎的研究 (1)、音読黙読及び理解度との関係</p> <p>3. 読書速度に関する基礎的研究 (2)、読書速度に関する要因</p> <p>4. 幼児教育科の授業における盲人の手引き実習 によって視覚障害者に対する態度がいかに変容するか</p> <p>5. 読書法及び視聴覚教育法の態度変容における効果 (1)、視覚障害者に対する態度変容</p> | 共著 | 昭和 55 年 10 月 | 日本特殊教育学会第 18 回発表論文集 P 500～P 501 | <p>盲児の点字触読速度の発達について、小学部 1 年生から中学部 3 年生にかけて学年ごとの平均速度から検討した。 (共同研究につき、本人担当部分抽出不可能) (共著者：佐藤泰正、塙和明、石田久之、徳田克己)</p> <p>成人を対象にした速読訓練を通して、読書速度の速い群と遅い群に分類し、その違いを音読・黙読速度の 2 つの尺度から見たものである。その結果、音読・黙読比が高いものほど全体的な読書速度が速いことが示された。これから、サイレント・ブォーカリゼーションの有無が速度に関係すると結論付けた。 (共同研究につき、本人担当部分抽出不可能) (共著者：佐藤泰正、塙和明、金城悟)</p> <p>読書速度に関する要因を、視知覚速度、読みのフレキシビリティ、スキッピング速度の 3 つの尺度から考察したものである。その結果、視知覚速度との相関はあまり見られず、むしろフレキシビリティの高さと読書速度との相関があることが認められた。 (共同研究につき、本人担当部分抽出不可能) (共著者：塙和明、佐藤泰正、金城悟)</p> <p>大学の講義・演習のなかで、障害を持つ人々に対する態度を正の方向に変容させるためにどのような方法を用いたら有効であるかを、一例として視覚障害者の歩行介助の体験を実際に行ないながら、検討・考察した。 (共同研究につき、本人担当部分抽出不可能) (共著者：徳田克己、塙和明)</p> <p>視覚障害者に対する健常者の態度を好意的に変容させる方法として読書法を用いて検討した。視覚障害者に関して物語風に描かれた小説を読ませる前と、読ませた後では視覚障害者に対してのイメージがどのように変わったかを SD 法を用いて考察した。 (共同研究につき、本人担当部分抽出不可能)</p> |
| | 昭和 62 年 8 月 | 日本読書学会第 31 回研究大会発表資料集 P 8～P 14 | | |
| | 昭和 62 年 8 月 | 日本読書学会第 31 回研究大会発表資料集 P 15～P 21 | | |
| | 昭和 63 年 5 月 | 日本保育学会第 41 回大会発表論文集 P 250～P 251 | | |
| | 昭和 63 年 8 月 | 日本読書学会第 26 回大会発表資料集 P 7～P 13 | | |

| | | | | |
|---|----|-------------|---------------------------------|--|
| 6. 読書法及び視聴覚教育法の態度変容における効果(2)、エイズ感染者に対する態度変容 | 共著 | 昭和 63 年 8 月 | 日本読書学会第 26 回大会発表資料集 P14～P20 | <p>(共著者:徳田克己、埴和明、佐藤泰正)</p> <p>我が国におけるエイズ感染者に対するイメージは、ともすると偏っているとされるが、血友病患者の実態、エイズに対する予防法などの正しい知識を示した書物を読ませることによって、エイズという病気に対する偏見がどの程度、消失するかを調査・検討した。</p> <p>(共同研究につき、本人担当部分抽出不可能)</p> <p>(共著者:埴和明、徳田克己、佐藤泰正)</p> |
| 7. 速読訓練の効果に関する研究(1) | 共著 | 昭和 63 年 8 月 | 日本読書学会第 26 回大会発表資料集 P29～P35 | <p>読書速度を増加させるために、どのような訓練方法が用いられるべきかを実験、検査によって明らかにした。実験に際しては成人約 200 名がその対象となった。機械を用いた他律的訓練方法より、自ら時間を計測しながら訓練する方法が有意に訓練効果が現れることが指摘された。</p> <p>(共同研究につき、本人担当部分抽出不可能)</p> <p>(共著者:佐藤泰正、金城悟、埴和明、徳田克己)</p> |
| 8. 速読訓練の効果に関する研究(2)、-眼球運動による検討- | 共著 | 昭和 63 年 8 月 | 日本読書学会第 26 回大会発表資料集 P36～P39 | <p>読書時の眼球運動の相違が読書速度にどのように影響するのかわ、アイカメラを用いて視点移動の距離、速度、停留時間を尺度にコンピューターによって解析した。その結果、読書速度の速いものほど、文字上の視点の停留時間、停留回数ともに減少傾向が見られることが検証された。</p> <p>(共同研究につき、本人担当部分抽出不可能)</p> <p>(共著者:佐藤泰正、金城悟、埴和明、徳田克己)</p> |
| 9. エイズ感染者に対する態度とその変容(1)、盲人に対する態度との比較 | 共著 | 昭和 63 年 9 月 | 日本特殊教育学会第 26 回大会発表論文集 P420～P421 | <p>エイズ感染者と心身障害者とのイメージの違いの比較を、一方を視覚障害者に限定して行なった。健常者がこうした人々との社会的距離どの程度、置こうとしているのかわを社会心理学で用いられる距離尺度(ボガードス)を用いて検討した。</p> <p>(共同研究につき、本人担当部分抽出不可能)</p> <p>(共著者:徳田克己、埴和明)</p> |
| 10. エイズ感染者に対する態度とその変容(2)、イメージの変容における講義法の効果 | 共著 | 昭和 63 年 9 月 | 日本特殊教育学会第 26 回大会発表論文集 P422～P423 | <p>エイズ感染者に対する正しい認識を与え、偏見を消失させるために、いくつかの方法を採り(前記の読書法も含む)、態度変容を図ってきた。本研究では、エイズに関する知識が豊富な医学関係者の講演を聴取することによって、どのようにイメージが変わるかを調査・検討した。</p> <p>(共同研究につき、本人担当部分抽出不可能)</p> <p>(共著者:埴和明、徳田克己)</p> |

| | | | | |
|---|----|-------------|---------------------------------|--|
| 11. 幼児の基本的生活習慣の発達に関する研究 (1)、3、4、5 歳の実態と発達傾向 | 共著 | 平成 2 年 5 月 | 日本保育学会第 43 回大会発表論文集 P 82～P 83 | <p>幼児の基本的生活習慣を 80 項目にまとめ、それが年齢によってどの程度、身につくようになるのかを、3 歳児から 5 歳児、約 2,000 名を対象に調査研究した。その結果、粗大運動的な行動が要求されるものについては比較的、早期に定着するが、微細運動を必要とするものに関しては、多少、遅れる傾向が見られた。</p> <p>(共同研究につき、本人担当部分抽出不可能)</p> <p>(共著者：中田カヨ子、新谷敏夫、小澤恒三郎、岡崎比佐子、小林厚子、埴和明)</p> |
| 12. 幼児の基本的生活習慣の発達に関する研究 (2)、躰に対する母親の意識 | 共著 | 平成 2 年 5 月 | 日本保育学会第 43 回大会発表論文集 P 84～P 85 | <p>幼児の基本的生活習慣のうち、躰に関して母親がどのような意識をもっているのかを自由記述させ、それをカテゴリー化した。その結果、母親がもっとも望んでいるものは、他人に対してきちんとした挨拶ができるようになるといったものであった。しかしながら、現実にはこうした行動は発達のみにみるとかなり後期に完成することが分かり、ギャップがあることが示唆された。</p> <p>(共同研究につき、本人担当部分抽出不可能)</p> <p>(共著者：岡崎比佐子、新谷敏夫、小澤恒三郎、中田カヨ子、小林厚子、埴和明)</p> |
| 13. 養成教育と現任研修における養成校の在り方に関する一考察 | 共著 | 平成 2 年 5 月 | 日本保育学会第 43 回大会発表論文集 P 654～P 655 | <p>社会福祉に従事する人物を養成する立場として、卒業後の現任研修の意義が問われているが、本研究では実際にそうした職についている者がどの程度の研修を望んでいるか、また内容的にはどのようなものを必要としているのかを調査・検討した。</p> <p>(共同研究につき、本人担当部分抽出不可能)</p> <p>(共著者：小澤恒三郎、埴和明)</p> |
| 14. 乳幼児のいる家庭の医師の選び方に関する総合的研究 I | 共著 | 平成 12 年 5 月 | 日本保育学会第 53 回大会発表論文集 P194～P 195 | <p>乳幼児のいる家庭 782 件を対象に日常生活の中で医師の選び方についてアンケート調査を実施した。1 ヶ月の通院回数、また病院、医院を選ぶ際の基準などを回答してもらった。その結果、子どもの母親の情報などが重視されるという結果を得た。</p> <p>(共同研究につき、本人担当部分抽出不可能)</p> <p>(共著者：徳田克己、水野智美、埴和明、横山範子)</p> |
| 15. 乳幼児のいる家庭の医師の選び方に関する総合的研究 II | 共著 | 平成 12 年 5 月 | 日本保育学会第 53 回大会発表論文集 P196～P 197 | <p>医者にかかる際の子どもの症状の程度や、その際の判断基準などの回答結果を基に保護者がどの程度自己診断をしているのかを数値化して示した。</p> <p>(共同研究につき、本人担当部分抽出不可能)</p> <p>(共著者：徳田克己、水野智美、埴和明、横山範子)</p> |

| | | | | |
|--|----|-------------|-----------------------------------|---|
| 16. 子どもはいつまでサンタクロースを信じるか。 | 共著 | 平成 12 年 5 月 | 日本保育学会第 53 回大会発表論文集 P708～P 709 | 子どもがクリスマスの際にサンタクロースの存在を信じて、幼稚園、保育園などでも催し物などを開催している。子どもはこの人物の存在をどのようなかたちで知り、またその実在性を信じ続けるのはどのような要因によるものであるかを調査研究した。 (共同研究につき、本人担当部分抽出不可能) (共著者：塙和明、水野智美、徳田克己) |
| 17. 子どもの虐待に関する新聞記事の分析 | 共著 | 平成 12 年 5 月 | 日本保育学会第 53 回大会発表論文集 P868～P 869 | 近年の児童虐待の実態は目を覆うものがあるが、新聞はこうした記事をどのような視点から取り上げ取材しているのかを最近の記事を取り上げ分析した。 (共同研究につき、本人担当部分抽出不可能) (共著者：山本哲也、桐原宏行、高見令英、水野智美、徳田克己、塙和明) |
| 18. 大学における介護等体験の効果的事前・事後指導について I | 共著 | 平成 12 年 9 月 | 日本特殊教育学会第 38 回大会発表論文集 P610 | 平成 10 年度入学の章、中学校の教職希望の学生に対して義務づけられた介護等体験実習について大学側ではどのような指導が望ましいのかを特殊教育諸学校、社会福祉施設関係者に調査をお願いし、その結果を基に分析をした。 (共同研究により、本人担当部分抽出不可能) (共著者：海老沢千冬、塙和明) |
| 19. 育児不安の構造に関する考察 (1) 母親らしさの形成の視点から | 共著 | 平成 13 年 5 月 | 日本保育学会第 54 回大会発表論文集 P192～P193 | 少子化が進む背景には「子育て」に対する意識の変化があると考えられている。子育てを実際にしている世代の保護者に調査を依頼し、この意識の中で育児に対する不安などからくる産児制限など様々な観点からこの不安感がどのようなところから生じているのかを分析した。 (共同研究により、本人担当部分抽出不可能) (共著者：深谷昌志、塙和明) |
| 20. 育児不安の構造に関する考察 (2) 父親の「育児関与」に関連させて | 共著 | 平成 13 年 5 月 | 日本保育学会第 54 回大会発表論文集 P194～P195 | 少子化が進む背景には「子育て」に対する意識の変化があると考えられている。子育てを実際にしている世代の保護者に調査を依頼し、この意識の中で育児に対する不安などからくる産児制限など様々な観点からこの不安感がどのようなところから生じているのかを分析した。本発表では父親が育児に関与する程度と育児不安との関係を分析した。 (共同研究により、本人担当部分抽出不可能) (共著者：塙和明、深谷昌志) |
| 21. 父親の家事および育児の協力に関する研究 I | 共著 | 平成 13 年 5 月 | 日本保育学会第 54 回大会発表論文集 P846～P847 | 父親の家事および育児の協力が母親の育児に対するストレスにどのように影響しているのかを調査研究したものである。本稿では母親が父親の育児参加をどのように評価しているのかを分析した。 (共同研究により、本人担当部分抽出不可能) (共著者：高見令英、横山知弘、塙和明、水野智美、横山範子、徳田克己) |

| | | | | |
|--|----|-------------|--|--|
| 22. 父親の家事および育児の協力に関する研究Ⅱ | 共著 | 平成 13 年 5 月 | 日本保育学会第 54 回大会発表論文集 P848～P849 | 父親の家事および育児の協力が母親の育児に対するストレスにどのように影響しているのかを調査研究したものである。本稿では育児に際してどのような場面でストレスを感じるのか、その時に父親にどのようなことを望んでいるのかを自由記述部分に関して分析を行った。 (共同研究により、本人担当部分抽出不可能) (共著者：横山知弘、高見令英、塙和明、水野智美、横山範子、徳田克己) |
| 23. 大学における介護等体験の効果的な事前・事後指導について 2. 体験を終えた学生に対する質問紙調査の結果から | 共著 | 平成 13 年 9 月 | 日本特殊教育学会第 39 回発表論文集 CD-ROM によるためページなし | 介護等体験を終えた学生に対する質問紙調査を行ない、大学における介護等体験の指導に関する体験者のニーズを明らかにした。体験者の多くは体験内容や体験先、介助方法の具体的かつ十分な知識についての指導を必要としていた。 (共同研究により、本人担当部分抽出不可能) (共著者：塙和明、海老沢千冬、徳田克己) |
| 24. 大学における介護等体験の効果的な事前・事後指導について 3. 大学における事前・事後指導実施の実態と今後の展望 | 共著 | 平成 13 年 9 月 | 日本特殊教育学会第 39 回発表論文集 CD-ROM によるためページなし | 全国の大学 200 校に対して質問紙調査を行ない、介護等体験の事前・事後指導の実施の現状および今後の展望について尋ねその実態を明らかにした。指導内容の具体性に欠ける点や指導時間の少なさなどが示された。 (共同研究により、本人担当部分抽出不可能) (共著者：海老沢千冬、塙和明、徳田克己) |
| 25. 外国人児童及び保護者と関わる際に必要となる語彙について —アメリカ合衆国のバイリンガル特殊教育の実践例から— | 共著 | 平成 14 年 5 月 | 日本保育学会第 55 回大会発表論文集 P744—P745 | 外国人児童及び保護者と関わる際に言葉の壁がしばしば指摘されるが、こうした問題を解決するためにアメリカ合衆国におけるバイリンガル特殊教育という分野で障害のある他言語児童に関する教育が実践されている。この際に必要とされる語彙について調査し、我が国の保育における他言語児童との接し方の手がかりを見出そうとした。 (共同研究により、本人担当部分抽出不可能) (共著者：那須野三津子、塙和明、高見令英) |
| 26. 父親の家事及び育児の強力に関する研究Ⅲ —夫婦の対比較の結果より (1) 父親の家事や育児の協力の実態— | 共著 | 平成 14 年 5 月 | 日本保育学会第 55 回大会発表論文集 P752—P753 | 父親と母親の家事や育児に関しては共同作業であるべきという指摘はしばしばなされるが現実には父親が家事や育児にどの程度、参加しているかは把握しにくい。今回の調査では乳幼児のいる家庭 271 組に調査を行ない、その実態を明らかにした。 (共同研究により、本人担当部分抽出不可能) (共著者：高見令英、塙和明、里見幸子、西館有沙) |

| | | | | |
|---|-----------|---------------------|--|---|
| <p>27. 父親の家事及び育児の強力に関する研究Ⅳ 一夫婦の対比較の結果より（2） 父親の家事や育児の分担の程度 と夫婦の話し合い—</p> | <p>共著</p> | <p>平成 14 年 5 月</p> | <p>日本保育学会 第 55 回大会発 表論文集 P754-P755</p> | <p>父親と母親の家事や育児に関しては共同作業であるべきという指摘はしばしばなされるが現実には父親が家事や育児にどの程度、参加しているかは把握しにくい。今回の調査では乳幼児のいる家庭 271 組に調査を行ない、その実態を明らかにした。 ここでは分担の程度が夫婦間でどのようになっているか、またこうした問題をどの程度話し合っているのかを分析した。 (共同研究により、本人担当部分抽出不可能) (共著者：里見幸子、高見令英、埴和明、西館有沙)</p> |
| <p>28. 盲導犬とのふれあいが盲導犬に関する認識に与える影響—小学生を対象にした認識調査の結果より—</p> | <p>共著</p> | <p>平成 14 年 10 月</p> | <p>日本教育心理学会第 44 回総会発表論文集 ポスターF32</p> | <p>盲導犬に対する理解が我が国においてどの程度進んでいるかについて、本研究では盲導犬とのふれあいがその後の盲導犬に対する認識にどの程度影響するかを小学生を対象に調査研究した。 (共同研究につき、本人部分抽出不可能) (共著者：石上智美、埴和明、徳田克己)</p> |
| <p>[社会活動] 1. 「八千代市地域福祉活動計画書」刊行に寄せて</p> | <p>単著</p> | <p>平成 9 年 3 月</p> | <p>八千代市地域福祉活動計画書 社会福祉法人八千代市社会福祉協議会、八千代市地域福祉計画策定委員会 P3~P4</p> | <p>八千代市地域福祉計画策定委員長として携わった福祉計画がその実現に向けて具体化していく過程の中で、計画自体の周知、徹底のために作成された計画書の冒頭に本書の刊行に際しての意義を綴ったものである。</p> |
| <p>2. 子どもの福祉をめぐって（講演）</p> | | <p>平成 15 年 10 月</p> | <p>東京都北区教育委員会区民講座</p> | <p>北区教育委員会主催の区民向けの講座において我が国の児童福祉の現状と問題点を様々なデータを基に講演した。</p> |
| <p>3. 児童福祉のとらえ方（講演）</p> | | <p>平成 16 年 11 月</p> | <p>東京都北区教育委員会主催区民大学専門コース</p> | <p>北区教育委員会主催の区民大学専門コースにおいて現在の児童福祉の現状を事例を交えながら講演した。</p> |